

Movie Review 66 #ジャッカルの日

『#ジャッカルの日 (The Day of the Jackal)』(1973年、フレッド・ジンネマン監督) をNHK BSで視聴した。フレデリック・フォーサイスの小説が原作。ド・ゴールフランス大統領の暗殺を企てる武装組織(OAS)が雇ったプロの暗殺者「ジャッカル」と、大統領暗殺を阻止しようとするフランス官憲の追跡を描いている。1972年エドガー賞の長編賞を受賞。因みに、後年の暗殺者の中にもこの小説を愛読したものも多いという。

アルジェリア戦争(1954年-)は泥沼状態に陥り、「フランスのアルジェリア」を信じて戦う現地駐留軍やフランス入植者の末裔らは、フランスの栄光を願う右派世論を味方に付けてアルジェリア民族解放戦線(FLN)やアルジェリア人の村落を殲滅するが、当時のフランス本国は第一次インドシナ戦争に敗退した惨状にあり、また相次ぐFLNの爆弾テロや残虐になる一方の戦争で厭戦世論も広がり世論は分裂した。1958年、ド・ゴールが大統領に就任し、「フランス固有の国土」のための戦争に一層力を入れてくれるものと期待したが、ド・ゴールは戦費拡大による破綻寸前の財政などに鑑み9月にアルジェリアの民族自決の支持を発表した。現地軍人らは、フランスで政府転覆を狙ってド・ゴールへのテロ活動を行ったが、暗殺計画はことごとく失敗し、組織の優秀な軍人達は逮捕され銃殺刑に処せられた。

フランス政府は警察や情報機関(SDECE)等でOASに対抗したため、OASには政府側のスパイが浸透し、秘密メンバーやその活動もほとんど判明してしまった。そこで、組織外からプロの暗殺者を雇うことを決め、目的遂行に最適の人物として一人の英国人男性を選ぶ。彼は「ジャッカル」というコードネームで呼ばれることを望み、報酬50万ドルを要求した。OASが組織を挙げてフランス各地で銀行などを襲い資金を集めの間、ジャッカルはド・ゴールの資料を徹底的に調査し、一年のうちに一度だけ、ド・ゴールが絶対に群衆の前に姿を見せる日(パリ解放記念式典)があることを発見してそれを暗殺決行日と決めた。ジャッカルは決行地点を選び、全ヨーロッパを移動しながら必要な特注の狙撃銃、偽造の身分、偽のパスポート、衣装や小道具、入出国経路などを抜かりなく用意する。

ここからフランス官憲の追求とジャッカルの騙し合いが面白い。

OAS幹部たちに不審な気配を感じたフランス官憲は、OASがド・ゴールを暗殺するために外部の殺し屋を雇ったらしいこと、その殺し屋が「ジャッカル」と呼ばれているらしいことを知る。内務大臣をはじめとするフランス各治安組織の官僚のトップ達が対策会議を開き、レベル警視に一任された。経験豊富なル

ベル警視は全権限を与えられたが、治安組織の官僚たちに定期的な捜査報告を行うことを求められ、権力者達の政治的思惑の波をかぶりつつも、ジャッカルを追い始める。

ルベル警視は個人的な伝手も用いてジャッカルの正体を洗うべく世界中の警察に問い合わせを行ったところ、不審な英国人男性のチャールズ・カルスロップが捜査線に浮上する。ジャッカルは分解した銃をレンタカーに隠し、偽名のパスポートを用いて既に国内に侵入していた。

ルベル警視は全国の国境やホテルから毎日届けられる入国者・宿泊者リストを洗い、南フランス一帯でジャッカルを何度か追い詰めるが、ジャッカルはいつも寸前で逃げ出して変装を変え、時にはホテル以外の宿泊場所を得るなどしてパリを目指す。ルベル警視は定例捜査報告会の内容がジャッカルに筒抜けになっているのではないかと疑い、報告会の出席者の電話を盗聴させ、愛人の女性（実はOASのスパイ）に機密情報を漏らしていた官僚を突き止めて報告会から追放する。また、ド・ゴール暗殺の決行日がいつであるかを直感する。捜査を搔い潜ってジャッカルはついにパリに入り、再び容姿を変えて潜伏する。

8月25日、パリ解放記念式典の決行当日、ジャッカルはどんな変装をして、ド・ゴールに近づくのか。式典の様子が、長々と映し出される。果たして、ルベル警視は暗殺を阻止できるのか。

終幕で、ジャッカルについて語られる。

フランスでは、1970年代以降、極左過激派や民族独立運動、さらにイスラム過激派によるテロが繰り返し発生した。近年では「シャルリー・エブド襲撃」、「パリ同時多発テロ」、「ニース車両突入事件」などがある。

フランスにおけるテロ活動の歴史的展開

1970～80年代：国内過激派と国際テロ

- ・極左過激組織「直接行動（Action Directe）」

1979年に結成。政府高官や企業幹部を標的に銃撃・爆弾テロを実行。1985年には国防省高官、1986年にはルノー会長を暗殺。

- ・民族独立運動に伴うテロ

コルシカ、バスク、ブルターニュ地方で独立派による爆破や襲撃が発生。

- ・国際テロの波及

パレスチナ問題やアルメニア独立運動に関連する組織がフランス国内でも活動。

1990年代：アルジェリア内戦の影響

- ・武装イスラム集団（GIA）がフランス国内で活動。

- ・1994年：エールフランス航空機ハイジャック事件。
 - ・1995年：パリ地下鉄サンミッシェル駅爆破事件、凱旋門駅爆破事件など。
- 2000年代：アルカイダ系組織の脅威
- ・「イスラム・マグレブ諸国のアルカイダ（AQIM）」がフランスを攻撃対象と名指し。背景にはアフガニスタン派兵やブルカ禁止法など。
- 2010年代：ISILによる大規模テロ
- ・2015年1月 シャルリー・エブド襲撃事件
風刺画掲載を理由に新聞社が襲撃され12人死亡。
 - ・2015年11月 パリ同時多発テロ
コンサートホール「バタクラン」などを襲撃し130人以上死亡。
 - ・2016年7月 ニース車両突入事件
トラックが群衆に突入し84人死亡。
- 2020年代：継続する小規模テロ
- ・2020年10月 パリ郊外で教師が風刺画を授業で示したことを理由に殺害される事件。
 - ・2023年10月 アラス市の高校で元学生が教師を刃物で襲撃。
 - ・2024年8月 モンペリエ近郊でシナゴーグ前に車両放火。

背景と特徴

- ・国内要因：移民社会の緊張、宗教的対立、独立運動。
- ・国際要因：アルジェリア内戦、アルカイダやISILの影響。
- ・特徴的傾向：近年は「ホームグロウンテロ」（国内育ちの若者が過激化）や「ソフトターゲット」（一般市民や公共施設）への攻撃が増加。

評価：★★★★★